

丹下憲孝 = 文・写真解説  
NORITAKA TANGE

気が付いた時にはもう手遅れであった。

タイの日差しは、庭でスタッフとの電話に熱中する私の肌を真っ赤に変えていた。

馴染み深いシンガポールともまた違う南国の日差しに少し戸惑いを覚え、後に控えているミーティングのため、スーツに着替えなければならない、水着姿の自分の行く末を呪った。

10年前、「バンコク・シティ・タワー」の完成と時を同じくして私はこの地を去った。それはタイを中心に波及したアジア経済危機の大波にさらわれるようでもあったが、それ以来、なぜだか縁遠い国になってしまっていた。当時常宿にしていた「グランド ハイアット エラワン バンコク」が今回の宿。知人の計らいで通された部屋は、最近出来たばかりのスパコテージタイプの客室であった。出張の宿にスパコテージ？私のボキャブラリーにはないチョイスであったが、この偶然を素直に受け入れ、密かにこのコテージでの楽しみ方を模索しながらタイでの仕事をこなすことにした。

結論から申し上げれば、このコテージ、かなり良い。

アーバン・リゾートの1つの完成形がここにはあるといってもよいだろう。最近ではスパなどのヒーリング関連施設を充実させ、リニューアルを図るホテルが多く見られるが、こちらは少し格が違う。ハードとしてのクオリティの高さもさることなが

ら、南国タイの空気がアーバン・リゾートという言葉のリアリティを確かなものとし、コテージの魅力を更に高めているようにも思えた。DESTINATION・リゾートを求めるのであれば、プーケットやサムイなど、このタイには数多くの素晴らしいリゾートがあるからそちらに行けばよい。しかし、そうそうバカンスに出かけるわけにもいかない日常の中で、心安らぐ時間を得ようとした場合、このスパコテージが持つ日常性と非日常性のバランスは、私の感性にぴったりとフィットするものであった。

普段とは全く異なる別世界。すべての日常を切り離し、瞬時にして消し去ってくれるのが、このスパコテージの空間。ホテルの5階に位置するスパフロアは、トロピカルでおおらかなメインエントランスとは趣向の異なる、白の空間としてモダンにまとめられており、清涼感にあふれながらも、温かみを失わない雰囲気心地良い。そして、6つのコテージはゲストに語りかけるような配置でコートヤードを取り囲み、私たちを出迎えてくれる。コートヤードに敷き詰められた大きな石畳は神秘的な印象すらもたらし、日常からの離脱を助長してくれる。また客室は、リビング、トリートメントルーム、バスルーム、ベッドルームの4部屋が連続的に配置されている上に、プライベートガーデンも備えているから、開放感に満ちた癒しのひとときを過ごすことができる。ただし、くつろぎすぎて肌を焦がさないように十分注意を払っていただきたい。

たった6室の楽園。

朝、目を覚ますと自然に水着を手取る自分がいた。

コートヤードの先にある専用のレストランで朝食を済ませ、プールでひと泳ぎ。それからいつも通り、スーツを身にまといビジネスモードの自分に切り替わる、それが苦にならない環境。ささやかな休息のひとときを、悠久にも感じさせてくれる豊かさがここにはあるのだろう。水着からスーツへ、この大いなる飛躍をさりげなく可能にしてくれる不思議な空間が、このスパコテージなのであった。\*

たんげ・のりたか——建築家/1958年生まれ。ハーバード大学視察環境学、工業エンジニアリングを卒業後、ハーバード大学大学院建築学専門課程を修了。2003年より丹下都市建築設計代表取締役社長。  
主な作品：サルバトーレ・フェラガモ・フラッグシップショップ（2003）、東京プリンスホテルパークタワー（2005）、統一グループ台北本社ビル（2005）、上海銀行本社ビル（2005）、キャセイ・シネプレックス（2006）など。

spa cottage exterior

求心的な建物配置や、高さのある開口部、大きな石畳が、少しミステリアスで、隠れ家的なイメージをつくり出している



spa cottage treatment room

自らの部屋で、極上のスパトリートメントを受けることができる。他にトリートメントバンガロー、ヘアサロン、ネイルバー、フィットネススタジオも併設されている



spa cottage patio

コートヤードと対比的なこじんまりとしたパティオ。どちらでくつろぐにしても長電話にはご注意ください



spa cottage bed room

白をベースにし、朱色、ブラウンを用いたカラースキームが、上品さと温かみを兼ね備えた雰囲気を出している



exterior

出窓がアクセントとなっている外観。写真はスパコテージがある5階の屋上プール付近からのもの

